ＣＩＴＥＳ'92参加自然保護団体の集い

政府機関とＮGOの関係
情報公開および交換について

舟　橋　直　子
（グリーンピース・ジャパン海洋野生生物および南極キャンペーナー）

今回のCITES締約国会議に参加していた団体は，その目的からいくつかのタイプに分けられるという印象を持った。

一つはこの会議に対してはっきりとした目標，例えばアフリカゾウを付属書Ⅰに据え置くこと等，を活動の中心にしている団体。もう一つは，自分たちが係わっている問題をアピールし，理解・賛同を集めてその後の運動に活かそうという目的で来ていた団体。そして，まずは参加してみてCITESについて学び，今後どう係わっていくかを考えようという団体である。

期間中にほぼ自動的に入ってくるもの以上の「情報公開および情報交換」が必要になるのは，CITES会議の中で何が目標であるかがはっきりしている場合であろう。

今回は会議前からECO（環境問題の国際会議の際，環境NGOによって発行される新聞）の編集が始まったおかげで，今まで以上の情報交換が行なえたのではないだろうか。もっとも多くの団体はお互いに顔見知りであったようで，共通の問題に関しては，NGO間の事前の情報交換はそれほど必要とされていないという感じであった。基本的な点で反対でなければお互い助け合うというのは，NGO間の不文律である。

ただし，事前の情報には限界はあるため，情報入手と同時にその分析をし，見解をまとめ，発表するまでの作業にスピードが要求されることになる。生態学者，法律の専門家等が，活躍する場であるが，NGO同士が協力し合わなければ各々の労力は効果が半減，あるいはムダになってしまうのである。

ってしまうのである。

政府とNGOの間の情報交換については，国ごと問題ごとにまったく異なる。が，CITESに限らず一般に日本政府のNGOに対する姿勢は，最低の部類に入る。第3世界の国々も対話の姿勢ははるかに進んでいる。もっとも進んだ国では，NGOを国の代表団の中に加え，お互いの知識・経験を尊重しつつより良い方向を目指している。このCITES京都会議で日本は初めて政府とNGOとのミーティングが開かれた。外交的，表面的な会話に終始したのは残念だったが，今後に期待はできよう。

さて，今後日本のNGOがCITESと係わっていく場合，情報入手，交換という面から何ができるだろうか。

まず第一に自分が，あるいは団体として，CITESとどう関わっていくのかをはっきりさせなければ，何も始まらない。アフリカゾウの保護にとって，CITESがどの程度重要であるかを見極め，あるいはベルン基準改訂に自身がどこまで関わるのかを決めることが，まずは必要だと思う。そうすれば，その目標のために何をすべきかが考えられる。どんな情報が必要かも見えてくる。その後は，「CITES'92 市民連絡会」の「NGO's WHO's WHO」リストをにらんで見当をつけ，情報を求める手紙を送ってみる，電話をかけてみる。CITES事務局だって情報はくれるはずである。